

黒人乳母 Dilsey

——Faulkner の Dilsey に対する温情主義のゆくえ——

Black Mammy Dilsey in *The Sound and the Fury* :

About Faulkner's Paternalism on Dilsey

Sachiko Suganuma

菅沼 幸子

要 旨

William Faulkner (1897-1962) は、本稿で取り扱う *The Sound and the Fury* (1929) の中で、アメリカ南部の人種や社会、文化、経済の状況を表現している。本稿では、Faulkner が、人種と共にどのようにジェンダーに焦点を当てているかを、脇役ではあるが重要な登場人物である、アメリカ南部の旧家 Compson 家の黒人乳母 Dilsey Gibson の描かれ方に注目して分析を試みた。

Dilsey と Faulkner 家の乳母であった Caroline (Callie) Barr (不詳-1940) との比較、Dilsey と主要登場人物である Compson 兄弟との関係構築の在り方、Faulkner が Dilsey に与えた宗教的啓示の体験、さらに、Dilsey が自らの決断によって得た精神の真の解放について順次述べることにより、論考を進めたい。

そして、Faulkner の創造した黒人女性 Dilsey に与えられた温情は、彼女にとって、結局どういう価値があったのか、解き明かしてみたい。

キーワード：黒人乳母、温情主義、“a square deal” (Cowley, 111)、アメリカ南部紳士、“de first en de last” (*SF*, 297)

はじめに

William Faulkner (1897-1962) がノーベル文学賞を受賞 (1949) した前後から、人種問題に関してさまざまな意見表明をしてきたことはよく知られている。文学作品の

登場人物が述べる意見はもちろん作家個人の意見と必ずしも一致するとは言えないものの、例えば、1948年出版の *Intruder in the Dust* (以降 *ID* と略す) の中で弁護士 Gavin Stevens が南部の人種問題について甥の Charles Mallison Junior に語る内容は、Faulkner が主に 1950 年代に公開書簡や講演などで南部の人種問題について意見表明をした内容に酷似しているのはよく知られている¹。

本稿ではノーベル賞受賞のきっかけとなった、*The Sound and the Fury* (1929, 以降 *SF* と略す) を取り上げるが、これは彼の初期のものであり、まだこの作品には、登場人物の語りや出来事が、直接的に人種問題に特化して語っているようには見えない。とはいうものの、この作品も南部の人種問題からは切り離せない。*SF* は Jefferson (Faulkner の創出した町) の白人中流家庭、Compson 家を取り巻く、1928年4月7、6、8日(復活祭の前後の3日間)と1910年6月2日(長男 Quentin Compson の自殺の日)の合計4日間の中で起こる日常的な出来事を題材としている。Faulkner はその中で、語り手が意識の流れ(Humphrey, 2)の中で想起する過去の出来事とともに、その日(章題の日)の登場人物の暮らしや彼らを取り巻く出来事を取り扱い、それによって約30年に及ぶ Compson 家の徐々に衰退する状況を描写している。その状況変化と時間的流れの中で、Faulkner 自身をも取り巻く、アメリカ南部の、人種や社会、文化、経済を、南北戦争(1861-1865)後の再建期以降から20世紀初頭の現在へと繋がる歴史的状況として表現している。

そして、現代にも言えることだが、社会には人種に加えてジェンダーの問題もある。Faulkner は社会的な状況を *SF* の中で表現するにあたり、ジェンダーにはどのように焦点を当てているのだろうか。*SF* では、Compson 家に対応する形で、その家に仕える黒人家族、Gibson 家がある。そこで、本稿では、黒人であると同時に女性でもある、黒人乳母、Dilsey Gibson の描かれ方に注目してみたい。Faulkner 家の黒人乳母で Dilsey のモデルともなった Caroline (Callie) Barr (不詳-1940) と Dilsey を比較することや、彼女と語り手である Compson 家の三人の男兄弟との関係の描かれ方、さらに Dilsey の教会における体験を分析することによって、そこから見えてくる、Faulkner の女性観も探って行きたい。

Faulkner の生きた、アメリカ南部では、1896年(Faulkner の生まれる前年)に Plessy v. Ferguson 判決によって、分離は差別ではない、ということが法的にも正当化された。また、1954年 Brown v. Board of Education of Topeka 判決で覆されるまで、

黒人と白人は生活空間を分けることが当然であったことに象徴されるように、人種差別が濃厚であった。Faulkner はこのような社会風土に育ち、差別を作った側の白人として、Toni Morrison (1931-2019) が言う “the impact of racism on those who perpetuate it” (11) を彼自身の痛みとしているはずだ。それは Malcolm Cowley が *The Faulkner-Cowley File: Letters and Memories, 1944-1962* の中で、1948年の夏に Faulkner が話したメモとして残している。

His [Faulkner's] farm is run by three Negro tenant families ... He lets them have the profits, if any, because ... the Negroes don't always get a square deal in Mississippi (111). [Underline mine]

このメモからは Faulkner が大農園時代のように農場を経営し、その運営を黒人にまかせ、そこから上がる収益を彼らのものとするなど、南部紳士として、彼らに対して温情的な態度を取っていたことがわかる。はたして、このような黒人に対する彼の温情主義的意識は、黒人女性である Dilsey を媒介にしてどのように反映されているのだろうか。

1. Dilsey –Faulkner² 家の Mammy Caroline Barr との関係–

Dilsey とはどのような人物であろうか。それを知るために、まず、彼女のモデルとなった Falkner 家の元奴隷、Caroline (Callie) Barr という黒人乳母から見ていこう。彼女について Faulkner が彼の随筆 “Mississippi” (1954) の中で “[She has been] free these many years but who had declined to leave” (Meriwether, 16) と言及している。Barr は奴隷解放後も Falkner 家に乳母として留まり、子どもたちの面倒を見、後年には長男 William に引き取られ老後を送った。

Barr は、Faulkner 家においては家族のように遇されていた (Murry C. Falkner, 13)。しかし、Compson 家の乳母 Dilsey にはそうした厚遇は与えられなかった。彼女の容姿は *SF* の最後の章、第4章の冒頭で描写されるが、それは、まさに辛苦に耐え抜き、今や老境に達しようとする元女奴隷の典型であろう。かつては豊かであった体躯が今は見る影もなく、不健康な容姿となり果てている。

She had been a big woman once but now her skeleton rose, draped loosely in unpadding skin that tightened again upon a paunch almost dropsical, as though muscle and tissue had been courage or fortitude which the days or the years had consumed until only the indomitable skeleton was left rising like a ruin or a landmark above the somnolent and impervious guts, and above that the collapsed face that gave the impression of the bones themselves being outside the flesh. (*SF*, 265-266)

それでも、その表情は、“fatalistic and of a child’s astonished disappointment” (*SF*, 266) と運命をそのままに受容し、その上、子供のような無垢な気質を未だに有しているようだ。

別の作品ではあるが、*ID* の中で Faulkner は、彼自身を代弁するかのように、Gavin に “they [Blacks] can stand anything” (*ID*, 397) と言わせている。Faulkner は、忍耐は黒人の特性と考え、また彼らに期待する美德の一つと考えていることがわかる。また、Faulkner は在日中 (1955)、長野で、“I [Faulkner] like to think of the characters I invented or wrote which to me are some of the best. One was the Negro woman, Dilsey” (Jelliffe, 69) と述べ、他にも “...she [Dilsey] is brave, courageous, generous, gentle, and honest” (Stein, 130) とまで称賛している。

黒人乳母 Dilsey は、Mrs. Compson には到底出来なかった母親としての役割を、温かさや勤勉で代行していた。そこには Faulkner が Barr に感じていたように、Dilsey の天性の、子供たちに対する包容力と愛情が大きく寄与していた。

しかし、その行動は本当に子供たちへの愛だけに基づくのだろうか。Faulkner には Barr との親密な関係があった。日々の暮らしの中で、それと同様な、やはり親密な関係を自身の黒人乳母 Van (Vannie) Price と持った Philip M. Weinstein は、次の引用文のように、彼が Vannie のことをどのように理解したかが、Dilsey だけにとどまらず、Faulkner の作品全体の彼の見解を形成したと述べている。さらに、それは、20 世紀中庸のアメリカ南部に於ける人種問題そのものであったとまで指摘している。

I [Weinstein] realized how much my way of knowing and not knowing Vannie shapes my optic not just upon Dilsey but upon Faulkner’s work more generally and indeed upon the realities of race itself during the middle of the twentieth century in the

South (5).

Weinstein は、当時は、奴隷制の名残で、黒人女性が“big house”に再び雇用された、もしくは、教育を受ける機会が無かった黒人女性が、専門性を要しない仕事として、低賃金で家政婦になった事例は多かったようだ (6) と指摘している。Dilsey 自身も Compson 家の長女、Caddy との会話の中で、自分の名前さえ読めないことを認めており (SF, 58)、まさに彼女自身も教育を受けられない境遇であったことがわかる。Barr が奴隷の身分から自由になっても Falkner 家に留まったように、Dilsey も Compson 家の元奴隷で解放後もそのまま Compson に留まり、乳母として雇用関係にあったことが想像される。

黒人乳母たちが白人家庭に雇用され、彼らと良好な関係を構築したのは、もちろん彼女らの人間性に負うところが大きかったとはいうものの、彼女たちの方にも黒人乳母としてそうしなければならない社会的状況があったのである。

Weinstein は子供時代から形成された Vannie との親密な関係を振り返って、彼女に感謝を捧げつつ、次のように述べている。

I needed to love and to be loved; so did she [Vannie]. In many houses through the South up to the mid-century, such black women must have responded to the call of needy white children—this despite the inequality of the arrangement . . . The solicited generosity of spirit that passes across the membrane of race is not illusory . . . maintained (for the black woman) by economic constraints. (9-10)

Weinstein は、Vannie が子供たちを愛してくれたのは、彼女が子供たちを愛していたからだが、そればかりではなく、黒人乳母の側の社会的、経済的理由による、そうすべき必要性があったことに言及している。また、彼は、両者の関係には、愛と同時に、白人社会の文化的土壌に内在する、白人と黒人の二重構造を是とする二律背反を認め、“What else but Love?’is an unanswered question” (Weinstein, 10) と、慨嘆している。

そのような白人家庭と黒人乳母との両義的な関係は、Faulkner と Barr にも当てはまった。これは Compson と Dilsey の関係にも当てはまるのだろうか。章題 1928 年

の約 30 年前、Compson 家の子供たちの祖母 Damuddy が存命中は互いへの思いやりのある関係も両者の間に存在したであろうことは想像に難くない。しかし、この物語の中では、今 33 歳の 3 男 Benjy が約 30 年前の出来事として、Damuddy の葬儀の様子を Caddy がのぞき見した、その日のことを思い出している。30 年後の今では、Mr. Compson も亡くなり、暖かい人間関係を構築することができない次男 Jason と Mrs. Compson、自身の意志を言語で表明できない知的発達遅滞の Benjy、そして Caddy の娘の Quentin の世帯構成となっている。世帯主となった Jason は “That’s the trouble with nigger servants, when they’ve been with you for a long time they get so full of self importance that they’re not worth a dam [sic]. Think they run the whole family” (*SF*, 207) と考えており、Compson の家族からは要求ばかりがあって懇情は皆無である。そうした状態であっても、一方的に、Dilsey からは、主家への忠誠心と Benjy への惜しみない愛が Compson の家族へ提供されている。

William Faulkner の弟、Murry C. Falkner が当時の黒人乳母のことを次のように述懐している。

The ‘Mammys’ of that time were women who, with everlasting devotion and loyalty, became second mothers to white children and in so doing became intimate and loved members of the households where they were employed (13).

そして Faulkner 自身も、随筆 “Mississippi” の終盤で、Barr の “the scope and range of that fidelity and that devotion and that rectitude” (*Meriwether*, 42) に感謝を捧げている。このように、Faulkner 兄弟は乳母の資質として同じ点を美德として評価しているが、その美德は当時の黒人乳母が、乳母の行動規範として白人家庭から期待されていたものであった。Faulkner と彼の弟からの感謝はあるものの、他方で、黒人乳母たちは、白人家庭で生きていくために、このような行動規範に従わざるを得なかったとも言える。これは、ジェンダーと人種の二重の縛りである。まさに Dilsey は、良識ある黒人乳母として、白人男性、つまり Faulkner の考える、たとえ主家の黒人乳母に対する取り扱いがどうであろうと、主家への忠誠を貫きとおし、愛情深く忍耐強い理想の黒人乳母として創出されている。次に、Dilsey と Compson 家の三兄弟、Quentin、Jason、Benjy との関係について詳細に考察してみたい。

2. Dilsey – Quentin の視点から –

まず、長男でハーバード大学在学中の Quentin と Dilsey の関係から述べる。Quentin には実の両親はいるものの、父は観念的な教師であるばかりだし、母からは、Quentin の自殺直前の心の叫び、“*if I'd just had a mother so I could say Mother Mother...*” (*SF*, 172) からわかるように、いくら求めても愛が得られない。それに比して、Dilsey は実母以上の存在となる。

Quentin は家父長制の色濃い南部で、旧家 Compson 家の長男として、両親の期待を受けて育った。例えば、次男の Jason のみを偏愛する母でも、長男の Quentin を名門のハーバード大学に入れることを彼女の夢としていた。そのためには“*your mother's dream for sold Benjy's pasture for*” (*SF*, 102) とあるように、困窮した Compson 家に最後に残った資産である、三男 Benjy の愛する牧草地を売却してでも学費を工面したほどだ。また、父からは祖父の時計を受け継いでいる。祖父の時計を授けられるということは、Compson 家の家督のみならず、より古い世代が持っていた南部紳士の精神性「旧南部の神話：・・・弱き者への温情主義・・・」(井出, 25) をも受け継いだことを含意する。

Quentin が、彼の人生最期の日に、彼自身が決めた自殺決行の時刻まで、街をさ迷い歩く時、彼の意識の流れ (Humphrey, 2) に沿って無意識的な想念が交錯する中で、一つの思い出が出現する。それは、クリスマス休暇で故郷へ帰る途中にロバに乗った黒人に出会い、Quentin が一気に生粋の南部人気質を取り戻す場面である。彼は、南部黒人を評して次のように述べている。

[Blacks are] blending of childlike and ready incompetence and paradoxical reliability that tends and protects them it loves out of all reason and robs them steadily and evades responsibility and obligations by means too barefaced to be called subterfuge even and is taken in theft or evasion with only that frank and spontaneous admiration for the victor which a gentleman feels for anyone who beats him in a fair contest, and withal a fond and unflagging tolerance for whitefolks' vagaries like that of a grandparent for unpredictable and troublesome children, which I had forgotten. (*SF*, 87-88)

Quentin の上記の述懐には温かく懐かしい気持ちがあふれている³。これには Faulk-

ner の故郷 Mississippi への郷土愛が関わっている。彼の随筆 “Mississippi” の結末を見てみよう。

Loving all of it [Mississippi] even while he [Faulkner] had to hate some of it because he knows now that you dont love because : you love despite ; not for the virtues, but despite the faults (Meriwether, 42-43)

この随筆の中では、Barr のことも数ページを割いて述べられており、当然この “all of it” 中に彼女も含まれる。Barr をモデルとした Dilsey もまた含まれるだろう。

これに加えて、Faulkner は 1958 年ヴァージニア大学での講演 “Address to the Raven, Jefferson, and ODK Societies of the University of Virginia” の中で、黒人と白人の関係について “But . . . we in the South . . . are capable in individual cases of liking and trusting individual Negroes” (Meriwether, 157) と述べている。Faulkner は、南部人は、ある特定の黒人については個人的に、人種の壁を越えて、互いに好意を持ち、信頼することが出来ると考えている。Barr はまさにこの特定の個人に該当し、随筆 “Mississippi” に表された、故郷を包括的に愛する心情に加えて、この演説で Faulkner が言う個人的親愛と信頼が Barr を通して Dilsey に色濃く反映され、Quentin の想念を借りて、Faulkner の Dilsey を含む包括的故郷愛が表出されている。

今まさに、Quentin は、

I will look down and see my murmuring bones and the deep water like wind, like a roof of wind, and after a long time they cannot distinguish even bones upon the lonely and inviolate sand (SF, 80).

と静謐な死に魅せられているが、やはり心理の深層では、

...the long invisible flowing of the stair-railing where a misstep in the darkness filled with sleeping Mother Father Caddy Jason Maury door I am not afraid... (SF, 173)

と、家族への別れがたい思いとともに、死への恐怖も感じている。“What a sinful

waste” (SF, 90) と、子供の頃のように Dilsey がまた叱ってくれることを願う Quentin の心情は哀れである。Quentin の深層心理には、“like that of a grandparent for unpredictable and troublesome children” と形容される、南部の黒人たち、特に Dilsey に包含される、何事も許容される大きな包容力を心から求め、自殺を思いとどまらせてほしいという願いがあに違いない。

確かに、Quentin の不幸の根源は、Bleikasten も言うように、実の母親の愛が希薄な状態で生育した環境にある (96)。実母の Mrs. Compson は、“they’re [Quentin, Caddy and Benjy] not my flesh and blood like he [Jason] is” (SF, 104) と Jason 以外の子を愛そうとしない。Dilsey は Quentin にとっても代理の母親的存在である。また、Dilsey は、夫 Roskus が “Taint no luck on this place” (SF, 29) と主家を貶めるようなことを言いかけるのに対して、“Show me the man what aint going to die, bless Jesus” (SF, 29) とたしなめ、判断力を見せている。知的な Quentin にとっても、Dilsey は信頼に足る人物であるはずだ。

だが、実際には、Quentin は子供の頃のように素直に Dilsey に助けを求めることはできない。祖父の時計を継承した男として、南部的な温情主義に立脚する白人 Quentin にとっては、黒人の乳母は温情を与えるべき対象であって、対等に頼れる対象ではない。Quentin は階級、人種への南部的規範を内面化した男である。従って彼にとって Dilsey は従属的な黒人乳母であり、独立した一個人ではない。結果として、彼には未来は “long diminishing parade of time” (SF, 76) にしか見えず、生き続けて未来を見通すことが出来ない。

では、次男 Jason と Dilsey の関係はどうだろうか。次の章で見ていきたい。

3. Dilsey – Jason の場合一

SF の第3章は、次男 Jason による “Once a bitch always a bitch” (SF, 180) という強烈な女性蔑視の語りで幕があく。Jason は、母親の “How can I control any of them [Quentin and Caddy] when you [Mr. Compson] have always taught them to have no respect for me and my wishes I know you look down on my people” (SF, 96) というような延々と続く愚痴を土台にして、彼女によって他の子どもたちとは精神的に分断された育ち方をした。その生育歴が悪影響を与えたのか、彼は、他の Compson 兄弟とはかけ離れた、酷薄で強欲、そして皮肉屋である。兄弟の中では一人だけ、母親から “he

“[Jason] was to be my joy and my salvation” (SF, 103) とまで当てにされて育ったが、Jason は、その母親さえも愛していない。例えば、Caddy の娘 Quentin に金を持ち逃げされた時、Quentin の部屋のドアを開けようとして、Jason は Mrs. Compson の管理している鍵束を取り上げようと、“Give me the key, you old fool!” (SF, 281) と母親に対して怒鳴りつけている。普段は母親を Mother と呼んでいるが、この時は本音が出たようだ。Jason は、Compson 家の兄弟の中で唯一母親の愛を独占しているかのように見えるが、実は、彼は、基本的に他人に親愛の情を持つことが出来ず、また女性を劣等視しているため、母親である Mrs. Compson の愛情でさえも、彼の精神には滋養となっていない。

南部の長子相続社会では、長男 Quentin には家系相続の期待とともに大学教育の機会が与えられたが、次男の Jason には与えられず、姉 Caddy の結婚が捗れば手にするはずであった銀行員になる夢も潰えた。さらに家名も資産も無くなった家を、長男の自死のため継承することとなり、Compson 家の経済的窮迫と存続の危機が重く彼にのしかかっている。章題の 1928 年には一介の労働者の身分に落ちぶれ、町の商店に勤める彼の給料が一家の支えである。そうした経済状態にもかかわらず、かつての名家 Compson の最後の虚栄の現われか、黒人乳母 Dilsey の一家が未だに召使として雇われている。

彼は、例えば旧来の農本主義に変わる新しい経済秩序の始まりの一つの形である綿花の先物投資に熱中する、合理性を好む新しいタイプの人物ではあるが、それでもまだ内面には

“...with Mother’s health and the position I try to uphold to have her with no more respect for what I try to do for her than to make her name and my name and my Mother’s name a byword in the town” (SF, 233)

と世間体を気にする古い気質も同時に保持している。それ故、女性の不身持は許せず、姉の Caddy に対する蔑視が内奥にあり、それに加えて旅回りの芸人の男と付き合う姉の子 Quentin の不身持も許すことが出来ない。姉 Caddy への復讐の代償行為としてその娘 Quentin を、彼は心身ともに横暴に扱うが、“She [Quentin] was fastening her kimono up under her chin, pulling it tight around her, looking at me [Jason]” (SF,

184) と、性的な興味も見せている。

今では Compson 家では Jason が支配的な家長として権力をふるっている。とはいえ、Dilsey は彼にとっては目障りな存在である。Caddy の娘の Quentin が引き取られてきた時の Dilsey の言葉、“Who else gwine raise her cep me? Aint I raised ev’y one of y’all?” (SF, 198) に象徴されるように、Dilsey が Jason をも育てた実績を示すと、彼には抗弁ができない。

後年、Malcolm Cowley によって *The Portable Faulkner* (1946) が編纂された時と、その同年に The Modern Library から同時出版された *The Sound and the Fury* と *As I Lay Dying* に、Faulkner は *Appendix* を付け足している。両者は微妙に相違があるようだが、Noel Polk によって Faulkner のタイプ原稿から編纂された *Appendix Compson: 1699-1945* (1946, 以降 *Appendix* と略す) を参照してみる。これは後日談として SF 本体とは切り離して考えるべきものかもしれないが、敢えて参照すると、その中の Jason の項で明らかなように、Jason の Dilsey への思いは、“fearing and respecting only the Negro woman” (SF, 338) と恐れと畏敬が交錯している。Mrs. Compson が亡くなった後、Dilsey を解雇すると、彼は、“He [Jason] was emancipated now. He was free” (SF, 340) とあるように、解放感に浸っている。

しかし、この恐れと畏敬の念は、Dilsey への感謝と尊敬の念や、また、一人の女性への正当な評価とはとても言えない。母親の愛情を補って余りある Dilsey の主家への忠誠に対し、感謝の念を持つと言う発想は Jason にはなかった。彼は、経済面では投資という新しい行動様式を示すが、精神面では古い形で女性を縛りつつも、紳士的な南部温情主義からはかけ離れ、弱者を抑圧することしかできない。Jason は、召使の身分で黒人女性である Dilsey を支配下に置きたいが、Dilsey の人間的存在感に圧倒されているため、虚勢を張って、彼女を正当に評価できないのである。次に末子 Benjy と Dilsey との関係はどうだろうか。

4. Dilsey –Benjy とともにー

SF の第 4 章は“April Eighth, 1928”、復活祭の日であった。教会から帰宅後、Dilsey の孫の Luster は、Compson 家の三男で、33 歳ではあるが知的発達が三歳程度の、Benjy の守りをしつつ、意地悪く Caddy の名前を連呼する。それに反応して、Benjy は自分の最も大切な人である姉の Caddy を完全に喪失したことを悟ったのだろうか。

Benjy の悲しみは、母親代わりの Caddy から愛されたい、換言すれば、母の愛を得たいと言う、人間の根源的な欲求に端を発しているものだけに、母以外の余人には癒せない。しかし、その実母は、“he [Benjy] was my punishment for putting aside my pride and marring a man who held himself above me I dont [sic] complain I love him above all of them because of it because my duty” (*SF*, 103) と言って、Benjy のことを、自分の家系のプライドを捨てて Mr. Compson と結婚したことに対する神の罰であるとし、Benjy を愛することは母性本能からの自然な愛ではなく、義務であると考えている。母は、Benjy のことを “My poor baby” (*SF*, 8) と呼び、Caddy は Benjy に対して、“You’re not a poor baby. Are you. Are you. You’ve got your Caddy. Haven’t you got your Caddy” (*SF*, 9) と語りかける。この二人の Benjy に対する態度を比較すれば、Benjy にとっては既に実母の愛は形骸化し、その代償として姉の Caddy が無償の愛を Benjy に与えるべく配置されていることがわかる。Benjy は、今、その大切な Caddy を喪失したことを実感するのである。

Faulkner が長野において、Dilsey を評して、“She held the whole thing together with no hope of reward, except she was doing the best she could because she loved that poor, otherwise helpless, idiot child” (Jelliffe, 69) と言っているように、彼女は家族からも見捨てられた Benjy にあふれんばかりの愛情を注いだ。その Dilsey もさすがに、Benjy のこの喪失の悲しみを癒すことはできない。Dilsey がいくら Benjy を抱きしめて、自分がそばに居ると告げても、彼はそれによって十分に癒されることがない。Benjy は、世間の誰からも見捨てられたように、激しく慟哭するのである。

“Dilsey led Ben [Benjy] to the bed and drew him down beside her and she held him, rocking back and force, wiping his drooling mouth upon the hem of her skirt. “Hush, now,” she said, stroking his head. “Hush, Dilsey got you.” But he bellowed slowly, abjectly, without tears; the grave hopeless sound of all voiceless misery under the sun” (*SF*, 316) と。

Benjy には自分の思いを語る言語的能力はなく、本能的な欲求に従うばかりであるが、その本能が今要求するものは母の愛であって、目の前の Dilsey の愛ではない。そこには母ならぬ乳母 Dilsey の限界がある。Dilsey 自身もそのことを察しているか

らこそ、母代わりの Caddy の形見のスリッパをその愛のよすがとして Benjy に持たせるが、いつもはそれで泣きやむ彼も今は泣き止むことはない。ここには Benjy の頭を撫でながら戸惑う黒人乳母、Dilsey がいる。もはや Dilsey にはなすすべがないのである。

そんな Dilsey は、その日の朝、Benjy とともに行った黒人教会で不思議な体験をすることになる。

5. Dilsey が見たもの —“de first en de last” (SF, 297) —

復活祭の日、教会では、招聘牧師の “Rev’un Shegog” が、キリストへの迫害と彼の復活に関する熱烈な説教をしている。“I sees de resurrection en de light; sees de meek Jesus sayin Dey kilt me dat ye shall live again; I died dat dem whut sees en believes shall never die” (SF, 297) と。会衆が熱狂的に同調し、牧師の “I seed de doom crack en de golden horns shoutin down” (SF, 297) という叫び声に合わせて、Dilsey にも何かが見えた。感動の涙をぬぐおうともしない Dilsey に、その娘 Frony が声をかけると、彼女は “I’ve seed de first en de last” (SF, 297) と返答する。

このシーンからは Dilsey のこの世に於ける深い諦念の情が読み取れる。Dilsey は Gibson 家の女家長として家族を率いて Compson 家に長年仕え、忠誠を示し続けるものの、その彼女の精励は現在の当主、Jason にも Mrs. Compson にも認められることはない。また、おそらく教育を受けていないであろう Dilsey には、日常的な家事遂行以上の職業能力の獲得の意欲も機会もなかったようだ。息子の Versh は Memphis へ働きに出る (SF, 31) 機会を見つけたということで、ある程度の社会的状況の変化がこの保守的な田舎町 Jefferson の黒人社会にも始まりつつあることがわかるが、Dilsey たち女性にとってはどうだっただろうか。一つの例として、当時の黒人女性の従事する一般的な職業の一つに洗濯業があったのかもしれない。Faulkner の別の短編小説、*That Evening Sun* (1931) の冒頭にも白人たちのための洗濯業に従事している黒人女性たちが描写されているし、その主人公の一人、Nancy も洗濯女である。また、SF にも、凍るような季節であるにもかかわらず (章題の日 1928 年 4 月 7 日)、小川で一日中洗濯をしている女性たちが登場する (SF, 14-15)。これはそのうちの一人が “. . . Time I get done over this here tub I be too tired to lift my hand to do nothing” (SF, 15) と言っているように、相当過酷な仕事だったようだ。Dilsey がもしも乳母以外の仕事

を得たいと考えても、教育のない彼女には洗濯業くらいしか選べず、彼女の世代にとっては、まだまだ黒人女性には開かれた社会ではなかったかもしれない。さらに、Dilsey には、Compson 家で長年乳母を続けることによって、Benjy の世話をし、主人に忠誠を示し続ける態度が刷り込まれている。もはや老境に達し、彼女自身の意識にも変化を求める清新な精神を湧出することは難しくなっていた。薄情で過酷な Compson 家での暮らしの中では、小さな希望すらも摩滅されてしまったかもしれない。そんな閉塞状況にある Dilsey が、今、Jesus の言葉、“Dey kilt me dat ye shall live again” を牧師を通して聞いたのである。この言葉に Dilsey は深く感応した。

Dilsey が見た “de first en de last” とは何を指しているのだろうか。答えは、帰宅したのち、彼女が泣き止まない Benjy に次のように語り掛ける言葉、“You’s de Lawd’s chile, anyway. En I be His’n too, fo long, praise Jesus” (SF, 317) の中に推測できる。Benjy は神の子であるが、自分も間もなくそうなるというのである。忍従の人生であったが、今、Jesus の言葉として、永遠の生の保証を受け、牧師と一緒に天国への扉が開くのを見、そして最初と最後を同時に顕現する神を見たからには、間もなく永遠の安息を得ることが出来ると Dilsey は悟ったに違いない。だからこそ、帰宅後、台所で独りになった時、Dilsey の口から自然と賛美歌が漏れ出た (SF, 301)。

Dilsey は、神を冒瀆するかのような Jason や、聖書を枕元へ置くよう要求するがその聖書を読むわけでもない Mrs. Compson (SF, 300) に対置されている。“How will they know it’s Dilsey, when it’s long forgot, Dilsey, Caddy said. I’ll be in the book . . . Can you read it? . . . Won’t have to, Dilsey said. They’ll read it for me. All I got to do is say Ise here” (SF, 58) と、神が必ず自分の名前を呼んでくれるから、その時に返事すればよいだけだと Caddy に答えるように、Dilsey は神への絶対的信頼という点に関して揺るがない。Faulkner は永遠の安息こそが神の恩寵⁴であり、それを受け取るのは名家 Compson の末裔ではなく、Dilsey こそが相応しいと考えているようだ。

先に 1. Dilsey—Faulkner 家の Mammy Caroline Barr との関係—の章で述べたように、Faulkner 家では長年仕えてくれた乳母 Barr を引き取っていたが、彼女の最後には Faulkner 自身が弔辞を述べ葬送している。その弔辞 “Funeral Sermon for Mammy Caroline Barr” では Faulkner 家に忠誠を誓い献身を尽くした Barr に感謝を述べ、最後を次のように締めくくっている。“if there is a heaven, she has gone there” (Meriwether, 117-118) と。The *Falkners of Mississippi* によると、“Mammy [Barr] was not

considered a servant by the family or by herself . . . There she would sit in the evenings, as much a member of the family as any of the rest of us” (Faulkner, 13) と、Barr はいかにも家族の一員のように扱われていた。しかし、象徴的なことに、彼女は Faulkner の家族と一緒に食事を取ることはなかった。そこには、厳然とした家族と使用人という身分の差があったのである。乳母の Barr に対して懇切な葬送をしたということは、Faulkner の南部紳士としての温情といえる。Faulkner は Dilsey に対しては、天国での将来的な安息を、彼女の目に “de first en de last” が見える形で保障した。そして、そうすることを通じて、Compson 家に忠誠と愛情を尽くした Dilsey に、もはやその能力のない Compson 家になりかわり、Barr にしたことと同様の、主人が使用人に与えるべき温情を与えたと言える。

この出来事は Dilsey 一個人が何らかの宗教的啓示を受けたことにとどまらない。Appendix に描かれた人物中の最終の Dilsey の項に “They endured” (SF, 343) と複数形 “they” で書かれているように、Dilsey は、困難を耐え忍んだ黒人たち全てを包括的に象徴する人物である。それ故に、彼女の嬉し涙は黒人全ての涙となり、悲惨な境遇にあった全ての人々の涙となる⁵。これは、まさに Mammy Callie Barr を始めとした、苦勞を耐え忍んだ黒人たちに、Faulkner 自身が考える温情、“a square deal” を与えていると言えるだろう。

だが、それはあくまでも来世における宗教的救済である。Dilsey が、Benjy に自分の着古した帽子を被せてやりながら、“We’s down to worse’n dis” (SF, 317) と述べているように、彼女の、生活は物心両面にわたって何の向上、変化もない。Faulkner は、あくまでも当時の白人社会の価値観である、黒人乳母の規範を受容する、つまり主人の家族に忠実に仕え困苦を受容する Dilsey であるからこそ、神の恩寵である永遠の安寧を彼女に与えた。しかし、換言すれば、そのような黒人乳母の規範の中で、人種とジェンダーという二重の苦しみには抑圧されている彼女には、その恩寵の積極的な価値は不透明なままである。一方、Dilsey 自身も、様々な局面において、喜びも悲しみも、また将来への希望や個人的欲求があるに違いないが、自発的にそれらについて述べるわけでもない。南部紳士の Faulkner には、古い南部社会の残像を引きずる Compson 家のことが物語の主要テーマであり、ジェンダー、まして黒人女性の抑圧に関する興味が薄かったのかもしれない。それ故、恐らく Dilsey に代表される黒人女性たちの苦しみの解決については思いが至らず、彼女に物を言わせていないの

ではないだろうか。彼の温情は、白人男性の価値観と宗教的な慰めに収束され、この時点では、女性の真の精神的開放と言う意味では、その効果は限定的と言える。

しかし、再度、*Appendix* を参照すると、Caddy の項で、老い果てた Dilsey が、貧しくともそれなりに安定した、娘 Frony との落ち着いた生活を送っているらしいことがわかる。そして、町の図書館員、Mellissa Meek が雑誌に掲載されたドイツ軍将校らしき男性と一緒に撮影された Caddy の写真を発見し、その写真を見せて、彼女を助けるよう Dilsey に求める。しかし、Dilsey は、Caddy がもはや助けを必要としていないことを理解した上で、“My eyes aint good anymore . . . I cant see it” (*SF*, 337) と Mellissa の求めを断る。*Appendix* は先に Jason の項で述べたように、*SF* とは別の物語として読むべきものではあるだろうが、後日談として Dilsey の状況を考えると、上記の Dilsey の決断は、老年になって、彼女が自身で決断した結果である、救助の拒否という形で、Compson 家と完全に縁を切ったことになる。こうして、主家への忠誠心という精神的なくびきから解き放たれ、ここに至って、彼女は、一個の女性としての自己を確立したとも言える。つまり、Dilsey は彼女の人生の最終章に至って、宗教的慰めではない、現実の自己の精神の真の解放を、自身の手で掴み取ったと言える。

ま と め

本稿では、*SF* の乳母 Dilsey と、Faulkner 家の乳母であった Mammy Callie Barr から見えるアメリカ南部社会の中での黒人女性の立ち位置について、次には Dilsey と Compson 家の三人の兄弟との関係について、Dilsey の啓示的体験について、そして *Appendix* から見た Dilsey の真の精神的開放について俯瞰してきた。Faulkner は、南部の古い気質から抜け出せず、滅びに向かう Compson 家の人々に対置する形で Dilsey を創造している。

Dilsey は、Faulkner 家の元奴隷で、乳母として Faulkner 家の子供たちの世話をし、後には長男 William Faulkner 家で終生を過ごした Mammy Caroline Barr をモデルとして創出された。Dilsey は、Faulkner が考える理想の乳母として描かれている。その乳母像は、当時のアメリカ南部社会の価値観が求める規範であり、辛苦に耐え、主人や子どもたちに無限の忠誠と愛をそそぐという、美化された虚像でもある。

それ故、Dilsey の声は極めて限られているし、彼女が願っているものの真相は不明

である。そして、彼女自身も奴隷制時代の気質を Compson 家の人々と共有し、奴隷制時代に叩き込まれたであろう、主人に対する忠誠心を内面化している。Barr や、引いては Dilsey も白人中心の文化の中で習慣化された古い行動様式を取る女性であり、それは Faulkner 自身の意識の反映とも言えよう。そこには、彼女たち自身の声はほとんど聞き取れない。

さらに、Compson 家の 4 人兄弟のうち長女 Caddy を除く、三人の男兄弟と Dilsey との、それぞれの関係に焦点をあわせてみると次のことがわかる。Dilsey は Faulkner の思想を代弁する Quentin とは強い絆を育み、自殺直前の Quentin は子供時代のように、乳母 Dilsey が叱ってくれることを切に求めた。その一方で、Quentin は、南部温情主義的な精神基盤によって、黒人であり女性である Dilsey を温情を与えるべき対象とみなしたため、彼女に助けを求めることが出来ない。もし Quentin が南部的な固定観念から脱していれば、彼は彼女の愛を手懸かりに、自殺を思い止まることができたかもしれない。また、次男の Jason は、そのような精神性や感受性とは隔絶した人物であるので、彼の虚勢を保つためには Dilsey は脅威であり、重圧でもあった。三男 Benjy の場合、Caddy の与えてくれる代理母としての愛、さらには実母の真実の愛を渴望する。母の愛を得たいという、人間の根源的欲求に対して、Dilsey にはそれに応じ彼を癒すことができない。本能のみに支配され、真実の母の愛を求める無邪気な赤ん坊のような Benjy の前では Dilsey にできることは限られている。

この三人の男兄弟に共通していることは、乳母 Dilsey との強い相互関係である。Benjy は本能のみで Dilsey に対応し、時には頼り、時には拒絶しているものの、他の二人は Dilsey が黒人女性であるが故に、対等の価値を認めていない。さらに、Dilsey 自身も積極的に自身の内面を声に出していない。Dilsey は、Compson 家の家族に対して、カウンターパートとしての主要な人物として設定されているが、結果的に 3 兄弟の意識の中では対等ではなく、それ故に、三人が共に欲求している母の愛が却って浮上している。あたかも、Dilsey の存在意義は Mrs. Compson の代理となる母性の発露にのみあるかのようである。これは、女性に対するステレオタイプ的な願望であり、母性神話といえるだろう。

さらに、Dilsey が見た天国での安息を象徴する“de first en de last”、換言すれば Faulkner の施し、“a square deal” は、来世での宗教的慰めに収束されて、現世での物心両面の解放を与えるに至らない。むしろ、白人が与える“a square deal”として、

黒人女性にとっては、上から下に与えられる施しであり、そこには屈服の姿勢が伴う。Faulkner の与えようとした温情、Dilsey を通して全ての黒人に与えられた特別な宗教的啓示は、Faulkner 自身の宗教的価値観から想像されたものであって、現実の黒人女性にとってはそれが現世での問題解決に寄与することはまれである。結局、与えられた温情は行き場を失ってしまうのである。

しかし、Dilsey は図書館員 Mellissa から頼まれた Caddy の救助を自らの決断で拒否する。こうして、Compson 家のくびきから完全に離れた時、Dilsey は身に刷り込まれた奴隷的忠誠心と、南部社会の乳母に対する規範という、人種とジェンダーの二重のくびきからの、真の精神的開放を、下賜されたものではなく、自分自身の手で掴み取ったと言えよう。

注

- 1 例えば、田中久男も、「彼 [Stevens] の言説が作者のそれに極めて近い」(305)と指摘している。
- 2 小説家 William Faulkner は 1918 年より元々の姓の綴り Falkner に ‘u’ を加えるようになった。従って彼の子供時代や、弟、Murry C. Falkner とは姓の表記が異なる。
- 3 加島祥造は、Quentin の、この南部黒人に対する感慨について、Quentin が黒人の融通無碍さに対して信頼を置き、Dilsey に、今彼が置かれた自殺直前の閉塞からなんとか脱する道を与えてもらいたいという願望の現れであると解釈している。Quentin が救いを求めなかった理由は、「南部の白人であるクエンティンには、そんなことは出来なかった」と喝破している。そして、「黒人たちの生き方に身を置きえなかったのは・・・白人たちが作りあげた階層的偏見からだ」と指摘している (61-64)。
- 4 岡田弥生は、「フォークナーの宗教概念と作品の主題とのかかわり」(岡田, 10) について論述された論文の中で「フォークナー作品は・・・作品の根底にはキリスト教を基調とした人間の実存にまつわる普遍的テーマを読み取ることが出来る」(岡田, 10) ると述べている。
- 5 André Bleikasten も “Dilsey’s tears become the essence of universal grief” (189) と指摘している。

6 引用英文中、イタリック体や非標準英語表記は原文の通りである。

引用・参考文献

- Bleikasten, André. *The Most Splendid Failure : Faulkner's The Sound and the Fury*. Indiana University Press, 1976.
- ed. “Introduction to *The Sound and the Fury*, 1933” *William Faulkner's “The Sound and the Fury”* Garland, 1982.
- Brooks, Cleanth. *The Hidden God ; Studies in Hemingway, Faulkner, Yeats, Eliot, and Warren*. Yale University Press, 1963.
- Buisson, Françoise. “*The Bluest Eye*, *The Sound and the Fury*, and the Grecian Urn : Faulkner's and Morrison's Quest for Beauty” *Faulkner and Morrison*. ed. Robert W. Hamblin and Christopher Rieger. Southeast Missouri State University Press, 2013. 97-115
- Cowley, Malcolm. *The Faulkner-Cowley File : Letters and Memories, 1944-1962*. The Viking Press, 1966.
- Falkner, Murry C. *The Falkners of Mississippi ; a memoir*. Louisiana State University Press, 1967.
- Faulkner, William. “That Evening Sun” *Collected Stories of William Faulkner*. Random House., 1934.
- . *The Sound and the Fury*. Random House, 1990.
- . “Appendix Compson : 1699-1945” *The Sound and the Fury*. ed. Noel Polk. Random House, 1990. 323-343
- . “Intruder in the Dust” *Faulkner Novels 1942-1954*. ed. Joseph Blotner and Noel Polk. Literary Classics of the United States, 1994.
- . *The Sound and the Fury* 『響きと怒り』上下 平石貴樹, 新納卓也 共訳 岩波書店, 2007.
- Humphrey, Robert. *Stream of Consciousness in the Modern Novel*. University of California Press, 1954.
- Jelliffe, Robert A. ed. *Faulkner at Nagano*. Kenkyūsha, 1956.
- Meriwether, James B. ed. *Essays Speeches and Public Letters by William Faulkner*. Ran-

- dom House, 1965.
- Morrison, Toni. *Playing in the Dark : Whiteness and the Literary Imagination*. Harvard University Press, 1992.
- Ross, Stephen M. and Noel Polk. *Reading Faulkner The Sound and the Fury : Glossary and Commentary*. University Press of Mississippi, 1996.
- Soda, Hiroaki. "Benjy's Confinement, Quentin's Withdrawal, Jason's Isolation, and Dilsey's Endurance : Reading Faulkner's *The Sound and the Fury*" *Eibei Gengobunka Kenkyū* 45. Osaka Furitudaigaku Eibei Gengobunka Kenkyūkai, 1997. 11-35.
- Stein, Jean. *Writers at Work The Paris Review Interviews*. ed. Malcom Cowley. The Viking Press, 1958.
- Weinstein, Philip M. *What Else But Love? The Ordeal of Race in Faulkner and Morrison*. Columbia University Press, 1996.
- 井出義光「総論」『アメリカの南部』, 井出義光, 本間長世, 大橋健三郎編, 研究社, 1973.
- 太田直子「*The Sound and the Fury* 管見—Black Mammy—」*Asphodel*, 同志社女子大学英語英文学会, 第22号, 1988: 252-270.
- 大友芳郎「*The Sound and the Fury* の Dilsey について」『東北大学教養部紀要』, 第32号, 1979: 21-41.
- 大橋健三郎『フォークナー研究』, 南雲堂, 1977.
- 岡田弥生『ウィリアム・フォークナーのキリスト像—ジェレミー・テイラーの影響から読み解く』, 関西学院大学出版会, 2010.
- 梶野正子「フォークナーの危機意識と南部の歴史」『立命館大学人文科学研究所紀要』, 第53号, 1991: 19-37.
- 加島祥造『フォークナーの町にて』, みすず書房, 1984.
- 金澤 哲「クエンティン・コンプソンの「老い」」『立命館大学人文学会』, 第634号, 2014: 746-736.
- 後藤和彦『敗北と文学—アメリカ南部と近代日本』, 松柏社, 2005.
- 須山静夫『神の残した黒い穴—現代アメリカ南部の小説』, 花曜社, 1978.
- 相田洋明『フォークナー, エステル, 人種』, 松籟社, 2017.
- 高田邦男「ウィリアム・フォークナーの世界」『英米文学シリーズ』, 第8号, 評論

社, 1978.

高屋慶一郎「ウィリアム・フォークナーの『響きと怒り』と「語り」の戦略」『〈境界〉で読む英語文学—ジェンダー・ナラティブ・人種・家族』, 現代英語文学研究会編, 開文社出版, 2005.

田中久男『ウィリアム・フォークナーの世界—自己増殖のタペストリー』, 南雲堂 1997.

寺沢みづほ『民族強姦と処女膜幻想』, 御茶の水書房, 1992.

中村久男. 「フォークナーの『町』——語りの構造と作者の私的世界」『同志社大学英語英文学研究』, 第 70 号, 1998: 163-182.

平石貴樹『メランコリック デザイン—フォークナー初期作品の構想—』, 南雲堂, 1993.

藤平育子『フォークナーのアメリカ幻想—『アブサロム, アブサロム!』の真実』, 研究社, 2008.

山本義浩「Dilsey のテキスト—*The Sound and the Fury* における Gibson 家の物語—」『文学論叢』, 徳島文理大学文学部文学論叢編集委員会, 第 36 号, 2019: 1-13.

